

文物が語る音の世界—月琴と阮咸—

月琴は阮咸の別名

唐代中期に墓から出土した銅製品が、図像に残る晉の阮咸の弾く楽器に似ていたもので、あらためて木製で造って「阮咸」と命名されたことを前回紹介した。唐代晩期になってそれに後日談が付け加えられた。晩唐の李匡文『資暇集』の記述である。

今においても未だ佳号を蒙らず、況んや阮は昔の賢なるものを云い、豈に名氏を以てして楽器を号する可けんや。其の形は月を象り、其の声は琴に合う、目して月琴と為すは宜なるかな。是れ自り之を知る者は、旧名を以て呼ばず（于今未蒙佳号、况阮云昔賢、豈可以名氏而号楽器乎。其形象月、其声合琴、目為月琴宜矣。自是知之者、不以旧名呼）

阮咸という賢者の懼れ多い名よりも、形が月に似て、音色は琴に合うので、「月琴」という名になったという。改名されて、旧名の阮咸と呼ぶものはないとのことだが、実際にはその後も楽器阮咸の名は失われなかった。

北宋（960～1127）には阮咸の楽譜も多数存在していたようである。宋代の慶暦元年（1041）に歐陽脩等によって編まれた『崇文總目』巻一に以下のような楽譜がみえる。

「阮咸調弄」二卷 不著撰人名氏

「阮咸金羽調」一卷 闕

「阮咸譜」二十卷

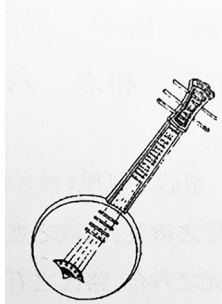
「阮咸曲譜」一卷 闕 不著撰人名氏

『崇文總目』の巻一には、「易」「書」「詩」「礼」「楽」という、儒家的觀念に則した由緒正しきものに関する文献が並べられている。その「楽」においては、文人楽器である七絃琴と阮咸のみ、その専門楽譜が何種類も記載されている。『宋史』にあるように、北宋初期に、太宗が五行思想に基づき四絃を五絃に改造させたこともあり、阮咸が特別な楽器として認識されていたことが窺える。

事典が示す月琴と阮咸の混乱

月琴について、北宋の音楽事典である陳暘『楽書』巻141 楽圖論・俗部には以下のように記載がある。

月琴 五絃、十三柱



月琴は、形は円く項は長く、上に四絃と十三の品柱、豪琴の徽を按じ、絃を転じて律に应ず。晉の阮咸の造りしものなり。唐の太宗は更に一弦を加え、其の弦に名づけて、金・木・水・火・土と曰う。開元中自り編じて雅楽に入れて之を用う（月琴、形円項長、上按四絃、十三品柱、豪琴之徽、転絃应律。晉阮咸造也。唐太宗更加一弦、名其弦曰金・木・水・火・土。自開元中編入雅楽用之）

月琴の解説には四絃としながら、図は五絃であるのは、宋初期の太宗による改良のためであろう。ここには、阮咸の改造は、唐の太宗によるとあるが、阮咸と命名された楽器の出現が唐代中期であり、あきらかに誤りである。記述の論理性からいって、阮咸が晉の制作で、唐の開元期に雅楽に編入されたとするならば、その前に五行に照らした改造がなされるのが筋と考えたのか。権威ある事典も鵜呑みにはできないことがわかる。さらに、『楽書』巻145「楽図論・俗部」に「阮咸琵琶」の解説が別にあげられて、阮咸と月琴についての混迷をさらに深めた。阮咸と月琴はその後どうなったのか。視点を日本に移してみよう。

日本に伝わった月琴

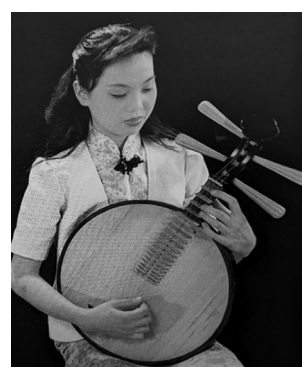
少し前には古道具屋にいくとよく四絃の月琴が置いてあった。それほど江戸から明治にかけて日本でも月琴が流行した。それは、もちろん中国国内での月琴の流行による。中尾友香梨『江戸文人と明清楽』（汲古書院、2010年）は、その由来などを詳述した書である。それによると、まず明代の中期頃から中国では「小曲」「小調」「小唱」「時曲」「時興雜牌新曲」「雜曲」「時調小曲」などと呼ばれる新しい韻文形式の音楽が各地で盛んに行われた。それは文人たちの伝統的な詞曲よりは卑俗で、農村の民謡よりは洗練された、いわば新興市民階級による通俗的な音楽であった（148頁）。中尾氏によると、それが日本に入ってくると、上品な「月琴音楽」と卑猥な「唐人踊」という2つの異なる形式となって定着し、『月琴音楽』は、月琴の音色と華音の歌を楽しむことをメインとし、長崎遊学の文人騷客によって三都およびその他の地域へと広められ、教養人の間で広く学ばれた。後に『清楽』として定着した（173頁）とされる。

その稽古は、右図（前掲『江戸文人と明清楽』9頁）のように、集まってなされたようだ。また、田辺尚雄『明治音楽物語』（青蛙房、1965年）の「九連環とカンカン踊」に、明治に流行していた明清楽、とりわけ清楽について、「その歌詞はすべて中国音（清音）を以て謡う。主要な楽器は月琴、琵琶、阮咸、胡琴（胡弓）、横笛（清笛）、三絃（蛇皮線）、木琴、太鼓などである。中でも月琴はもっとも広く行われ……」と、月琴の普及が後のピアノの流行のようだったとある（63頁）。この記述によっても、阮咸と月琴は別楽器だと明確にわかる。なかでも四絃の月琴は、誰でも簡単に弾けて持ち運びにも便利で、人気を博したのであろうと考えられる。



月琴は阮咸とは異なる楽器

現代の中国音楽を見てみると、月琴（写真『中国楽器図鑑』山東教育出版社、1992年、214頁）はやはり阮咸とは異なる楽器とされている。劉文榮『古今同名楽器考』（上海音楽出版社、2023年、49頁）によると、月琴は頸が短くて、共鳴板を内包する胴部が大きい作りであるが、阮咸は頸が細くて長く、胴部が月琴より小さいとある。



その扱いやすさからか、月琴は京劇の伴奏楽器としても必須のものであるだけでなく、錫劇・漢劇・桂劇、台湾歌仔戲など地方劇にも用いられた。さらには、少数民族の彝族も月琴を用い、「絃子」と呼ばれた。演奏時には（4本のうち2本の絃は同音で）結局2本の絃を操るので、演奏方法も簡単であり、複雑なリズム変化は少ない（薛宗明『中国音楽史』楽器篇（下）台湾商務印書館、1983年、767頁）という。

そういえば、阮咸が月琴と呼ばれるようになった由来として冒頭に紹介した『資暇集』は、作者名も李匡文か李匡父かはっきりとせず、世俗の談義をあれやこれや取り上げた書だった。実は、つとに晩唐から俗楽器の「月琴」は、文人楽器の「阮咸」とは別の道を歩み始めたのかもしれない。